

令和4年度 第4回第6期松本市地域づくり市民委員会 会議要旨

開催日時 令和5年3月10日（金曜日） 午後2時30分から午後4時まで

開催場所 大手公民館 大会議室

出席者（敬称略）

委員 降旗都子（委員長）、丸山宗志（副委員長）、一ノ瀬知佐子、永塚 博、山下京子、
塩島くるみ、百瀬 壽、倉澤 聡、櫻井美智代、赤羽 勝、田村貴以子、中島麻衣、
平林 洸

（欠席：春日孝介、鳥羽弘幸）

市職員 島内地区地域づくりセンター センター長 勝家 隆

センター長補佐 長坂岳紀

芳川地区地域づくりセンター センター長 坂上浩美

センター長補佐 柳本真里

事務局 地域づくり課 地域づくり課長 廣田圭男

地域づくり担当 係長 床尾拓哉、主事 太田晴香

1 開会

（降旗委員長）

2 あいさつ

（降旗委員長）

3 前回議事録の確認

（降旗委員長）

- ・ 事前に修正等の申し出あり。該当箇所を修正し、確定としたい。

<意見等>

- ・ なし

→確定版を市公式ホームページに掲載

4 会議事項（議長 降旗委員長）

(1) 地域自治支援交付金（提案事業分）に関する質問について

（降旗委員長）

- ・ 前回グループワークにおいて、モデル地区への質問事項を協議したところ、交付金の制度に関する質問がいくつか見受けられた。
- ・ モデル地区への聞き取りを行う前に、基本的な事実確認を行いたい。

（事務局 床尾）

※ 「地域自治支援交付金（提案事業分）に関する質問について」に基づき説明

<質問・意見等>

- ・ なし

(2) 地域づくりセンター強化モデル地区への聞取り

ア 報告①：島内地区

(島内地区 勝家センター長)

※ 「島内地区防災モデル事業の取り組みについて」に基づき説明

イ 報告②：芳川地区

(芳川地区 坂上センター長、柳本センター長補佐)

※ 「地域づくりセンター強化モデル事業～芳川地区の取り組み～」に基づき説明

ウ 質疑応答

※ 丸山副委員長の進行及びコーディネートで実施

<質問・意見等>

(櫻井委員)

・ 地区の重点課題はどのように決定したか。

→ (島内 勝家) 地域づくりセンター及び公民館、地区町会連合会で協議し決定

→ (芳川 坂上) 同様に地区町会連合会と相談の上、決定

(櫻井委員)

・ 令和2年度から重点課題の検討が始まっていたということか。

→ (事務局 床尾) 3年度当初から事業着手するため、2年度中に実施地区の選定、重点課題の検討等を行った。

(櫻井委員)

・ モデル地区はどのように選定したか。

→ (事務局 床尾) 基本的には各センターの手上げによる。

(櫻井委員)

・ 芳川地区のアンケートでは、モデル地区としての重点課題と住民の意識・関心との間にギャップがあった。事業を進める上で問題はなかったか。

→ (芳川 坂上) アンケートによって住民の関心が防災にあることも分かったが、若い世代が多い地区であり、そうした地域人材を生かしていくことは必要。アンケート結果とのバランスを意識しながら取り組んできた。

(櫻井委員)

・ 令和3年度から継続的に実施している事業はあるか。

→ (芳川 坂上) 芳川いきいきプロジェクトは継続し、若い世代の提案を概ね具現化できた。

→ (島内 勝家) モデル町会の取り組みを進める中で、介護保険事業所との連携の必要性が見えてきた。BCP(事業継続計画)策定や福祉避難所の運営など、やるべきことが次々と出てくるため、終わりが無い。小中学生向けの防災学習プログラムも未完成であり、引き続き試行錯誤が必要

(永塚委員)

・ HUG(避難所運営ゲーム)の実施は、中学生に避難所運営を助けてもらうことを期待したものか。

→ (島内 勝家) その期待感はある。市長との懇談会があった時に、生徒会役員が参加していて、話をする中から「中学生も地域のレギュラーメンバーだとわかった。」という発言を市長もしている。

(永塚委員)

- ・ 小学生の防災学習プログラムはどのような内容か。
→ (島内 勝家) 防災物資ターミナルを見学した他、ハザードマップの見方を学んだ。宿題として、家の持出品の確認もしてもらった。その他、避難所体験や東日本大震災の際、仙台にいた職員から体験談を聞くなどした。

(永塚委員)

- ・ 災害時、小学生主導で避難してもらうことを想定した取組みか。
→ (島内 勝家) 小学生にそこまでの期待はしていない。家族と話し合うことで、防災に関心を持ってもらうねらい。対して中学生のプログラムでは、自分たちに何ができるかをイメージしてもらうようにしている。

(永塚委員)

- ・ 隣組に防災担当者を置くという話もあったが、進んでいるか。
→ (島内 勝家) モデル町会の島高松の取組みの中で、隣組で話し合いを行った際に、固定の防災担当を置いた方がよいという隣組もあれば、それだと他人事になってしまうからみんなでやろうという隣組もある。それぞれの状況に応じて、隣組ごとに話し合って決めてもらっている。

(赤羽委員)

- ・ 事業を行う中で、主体となって取組んだのはどのような団体か。事業に対して地域づくりセンターとしてどのような支援を行ったのか。
→ (島内 勝家) 取組内容については各町会で話し合ってもらった。センターからの支援としては、取組みを進めるにあたってのアドバイスや情報提供
→ (芳川 坂上) 住民主体が理想だが、一番苦勞しているところでもある。その中でも、野溝ほうきプロジェクトは作り手らが先頭に立ってメンバーをまとめている。今後センターとの関わりを整理することが課題。
芳川いきいきプロジェクトは、メンバーの大学生、高校生などの卒業により現メンバーでの継続は難しいと感じている。今年度は一緒に事業の検証を行いながら、主体性が生まれるように働きかけていきたい。

(赤羽委員)

- ・ 両地区とも一生懸命やっている。ただ、地域自治支援交付金については、センター長が採択事業や交付額を決定するため、主体が入り乱れてしまうように感じた。

(中島委員)

- ・ 若い世代が活動してよかったことは何か。呼びかけの際、苦勞したことはあるか。
→ (芳川 坂上) 呼びかけでは、興味を持ってもらえず苦勞した。興味を引き出すことが今後の課題。
→ (島内 勝家) 中学校の防災学習プログラムは、松本大学の防災士を目指す学生らと作成した。中学生にとっては、世代の近い大学生から教えてもらう方が身近に感じられる。自らも将来、大学生らのようになりたいと思う効果も期待できる。

(丸山副委員長)

- ・ 大学生は就職に役立つと言えば参加してくれる。実はそこにヒントがあり、若い

人には、メリットを示すことが必要なのではないか。

- ・ 若者が単なる労働力として使われていて、残念に思うこともある。
- ・ 第5期委員会では、「楽しさ」や「やりがい」をどうやって感じてもらうか、それによって繋がりが生み出せないかを議論した。
- ・ 両地区とも、取組みにどのような意義があったのかを、参加者にフィードバックしていく段階にあると思う。そのような営みが積み重なっていくことで、広がりが生まれてくるのではないか。

(降旗委員長)

- ・ 公民館や福祉ひろばとの連携はどうなっているか。
- ・ 採択事業の活動者とは、どのような手段で、どのくらいの頻度で連絡を取っているか。また、事業へはどのくらいの間隔で参加しているか。
→ (島内 勝家) 公民館活動によって、地域の人材育成が進んでいた、幅広い活動が構築されていたという点で、公民館に助けられたと思う部分は大きい。
実行委員会に地区公民館長も入っているが、公民館が直接防災事業に関わっているわけではない。しかし、例えば島高松町会の町会長は、館報編集委員の経験があり、話し合いで方向性を決める、ワークショップ等でみんなから意見を吸い上げる、吸い上げた意見を広報する、ということをやってきた人。そうした公民館のノウハウがきちんと押さえられている。
隣組で話し合いを進めようとした際、防災部長さんは「そんなことできない」と言ったが、町会長が「話し合いが大切なので、ここはやりましょう」と推してくれた。そういう基盤があったから進められた。
- (島内 長坂) ハッピープロジェクトについては、公民館長が代表者と連携して活動を進めている。島内公園さくらライトアップ事業はメンバーの一人が町会長で、その方を通して連絡を取り合っている。若者向け講座を通じた顔の見える環境づくりは、福祉ひろばや生活支援員等の島内地区関係者が、業務外で始めた取組み。自分もメンバーの一人として活動している。
- (芳川 坂上) 芳川は公民館と共に活動することが多い。また福祉ひろばがセンターと併設のため、自然な形で協力ができていると思う。
センター長が異動したとしても、信念を持って活動を続けられる人を育てることがセンターの仕事。また、小さなコミュニティが大切であり、町会に対するサポートも重要。
3年度提案者との関わりについては、継続している団体もある。
- (芳川 柳本) 4年度提案者との関わりは、対面、メール、LINE等により頻繁に連絡を取っている。
芳川地域づくり協力隊は、自分も事務局として一緒にやっていく立場。LINEで頻繁に連絡を取り共に活動している。

(3) その他

(事務局 太田)

- ・ 今後のスケジュールについて

(以上)